邂逅

らいとてん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

邂逅

【コード】

N05130

【作者名】

らいとてん

【あらすじ】

前世：とある富豪のご子息ご令嬢の世話係兼護衛。

今世：自称平凡な村娘。

そんなナーシャの異世界生活。

別離は、新たな出会いの始まりでもある。

さよならは、言わない。祈るのは貴方達の幸せだけ。

暗い路地裏に、追い詰められた青年がいた。背後の壁に背をつけ、荒い呼吸を繰り返す。

その目前では、眼をギラギラさせた男が拳銃を構えてた。

「お前さえいなければ、俺は！」

叫び、その男が引き金を引こうとした瞬間のことだった。突如、横道から、一人の女が飛び出してきた。自分を背後にかばう女性に青年が何かを叫ぶ。

乾いた銃声が、その叫びを打ち消した。

闇夜に鋭く響いたその音がこだまする中で、女性は、冷たいコンクリートに崩れ落ちた。

青年は女性に駆け寄り、服が汚れるのもかまわず、抱き起こす。そんな二人を忌々しげに見つつ、再び引き金を引こうとする男の背後に、スッと忍び寄る影があった。

影はまだ幼い少女であった。

少女もまた、その手に拳銃を持っていた。薄暗い街灯の下で、不吉な金属の塊が鈍く光る。狙いを定めたその影は、震える指に力を込めた。

「コウ様。おやめください」

凜とした声が、その手を止めさせた。

コウは一瞬の躊躇の後、男の首に手刀を入れる。

倒れる男には目もやらず、二人のもとへ駆け寄るコウ。

同時に、どこからともなく、黒服の集団が現れ、男を回収していく。

「カイ」

コウは、震える声で、女性を抱きかかえるカイに呼びかけた。

カイは、うなだれ、そつと首を振った。

女性はカイの腕の中で、目を閉じ、今や息も絶え絶えとなっていた。カイの眉が苦しげに顰められる。

「アヤ。どうして」

その問いかけに、ふっと、アヤが、目を開け、最愛の二人を見た。

彼女にとって彼らは、

守るべき主人であり、

愛すべき家族であり、

愛おしい子供であった。

最期に二人の顔をしっかりと脳裏に焼き付けておこう。

私が行くのが天国にしる、地獄にしる、

貴方達にお仕えた、その記憶こそが、

私を救うだろう。

別れの時が近づくのを、彼女は感じた。

泣きそうな顔のコウと悲嘆にくれるカイに、

精一杯の愛情をこめて、微笑みかける。

「カイ様。コウ様」

かすれた声を、必死に、絞り出す。

「どうか、お幸せに」

愛しています。

どうか、悲しまないで。

どうか、笑って。

どうか、この愛しきわが主に幸多からんことを。

最期に、そう祈って、彼女は又の世へと旅立った。

「「アヤ!」「」

あとに残された二人の慟哭を聞くことなく。

こうしてコウとカイにつかえた「アヤ」はその一生を終えた。
物語はここで終わる。

.....はずだった。

されど物語は続く。望むと望まぬとに関わらず。

胸を打ち抜かれたかのような衝撃を感じ、ナーシャはベッドから飛び起きた。眼に映るのが見慣れた自分の部屋であることに安心して、ドサツと、体をもどす。

「また、あの夢・・・」

汗に濡れた額に、髪が張りつき、不快だった。そつと、目を閉じて、乱れた息を整え、いまだ踊り狂う心臓をなだめる。頬を温かいものが伝うのを感じた。あの夢を見た後は、いつもこうだ。

ナーシャは、この世に生まれた時から、その記憶を持っていた。そして、今まで幾度も、それを自分の中、深く封じ込めようとした。自分は、ただの鍛冶屋の娘だ。そう、超絶美系な上に天才肌の兄と違い、私はどこにでもいる村娘。ありふれた金髪碧眼に、平凡な顔立ち。どうという特徴もない、ただの娘。そんな自分に壮絶な人生をおくった『アヤ』の記憶はあまりにも重かった。幾度、捨て去りたいと思っただろうか。

だが、夢が、自分にその存在を教えるのだ。まるで、その記憶のことを忘れるなどでも言いたげに。そして、自分も、本心では。

夢の中で、ナーシャは『アヤ』と呼ばれ、いつも、『カイ様』『コウ様』と共にいた。二人の勉強を見ていることもあれば、公園でピクニックをしていたり、動物園に二人を連れていったりもした。

そんな時『アヤ』の胸にあるのは、ただ、二人への慈しみだけだった。『アヤ』は、血はつながらずとも、彼ら二人を、自分の子供

のように愛していた。彼女の悲哀に満ちた人生の中で、唯一の救いは、その二人のいと子達だった。

二人に逢いたい。そう、何度思っただろうか。だが……。

ため息をつき、ガウンをはおると、ベッドから降りる。ペタペタと裸足で板の間の上を歩き、窓に近づく。開けば、サアッと心地よい夜風が部屋に入る。そして、彼女は、夜空を見上げた。そこには……。

二つの赤い月が昇り、ナーシャの村を皓皓と照らしていた。

そう、ここは、日本ではない。
地球ですらない。

ナーシャが、今いるのは、ガリレ大陸のフィンアン国。

『アヤ』は異世界に転生したのだ。

ならば、なぜ！

なぜ、こんな記憶を私は持たなければならないのだ。二度と会えぬのであれば、こんな記憶、持つていても仕方がない。二人の夢を見ると、その顔を見られたことへの喜びと、二度と逢えぬことへの絶望に、胸が狂おしいほど締め付けられる。

いままで、この記憶のことを誰かに相談したことはなかった。ナーシャは、生まれた時から、『アヤ』の記憶を持っていた。それは彼女に、子供に似つかわしくない良識と深い洞察力をもたらした。だから、相談などできなかった。『前世の記憶があるの。どうしたらいいの？』などと、誰に聞けというのだ。子供の戯言と片づけられるか、気でも狂ったかと騒がれるのがオチだ。

ナーシャは、涙でゆがむ月を睨みつけた。その異世界の象徴たる二つ月を一匹の飛竜が横切る。首元で光っているのは、おそらく所有の証。珍しい。よほど急ぎの品を届けに来たのだろうか。こんな辺境の村に。どうしたというのだろうか。

ナーシャは胸騒ぎを感じて、慌てて着替え、飛竜が降り立った村役場へと向かった。

彼女は、知る由もなかった。

この日を境に、彼女の世界が大きく変わるなどとは。

喜ばしき今日という日に祝福を。馬鹿な兄に制裁を。

招待客から、歓声が上がった。教会の祭壇の前では、永遠の愛を誓い合った若い夫婦が熱烈に愛を交わしている。・・・もう少し人目をはばかった方がいいのでは。しかも、なんか、新婦がかなり恥ずかしがっている。耳が真っ赤。というか本気で嫌がってないか、あれは。あ、新婦が新郎に蹴りを入れた。おお。ヒールがクリティカルヒット！ 悶絶するその男、キールが自分の兄であると認めたくない、ナーシャ、15歳は心の底から思った。

しかも、彼女はこの先、あのカップルと同居をすることになるのだ。・・・早く自立しよう。うん。彼女が心の中でそう決意する中、兄夫婦の結婚式は、粛々・・・いや、騒々しく進んでいった。

結論から言えば、あの飛竜は兄の結婚式への招待であった。両親は腰を抜かした。

上級貴族でなければ使えないはずの飛竜が、兄の手紙を運んだこと以上に、新婦の名に。

『ナスターシャ・ガレンシア』。

その名は、我が国の四大貴族に名を連ねる一族のものだった。

兄は、とんでもない逆玉に乗ってくださったのだ。

手紙には、婚約の報告とともに、両親とナーシャに共に暮らしてほしいこと、そこで、結婚式までに、家を引き払い、王都に来てほしいこと、すでに、この手紙を追うように、ガレンシア家の飛竜が我々だけを先に運ぶために、こちらに向かっているということを書いていた。

まるで、自分たちが兄のもとに行くのが当然であるかのように。

その身勝手さにむっとした。そして、結婚式の日取りを見て、さすがに、顔が引き攣る。結婚式の日付は、3日後であった。そして、手紙によれば、自分達は、明日の朝来る飛竜に乗ってその日のうちに王都に着くことになるらしい。

恐る恐る両親を窺う。父は腕組みをして、手紙を睨みつけ、母は、頬に片手を当て、呆れを隠せないという風のため息をついている。

「おい、リュサ、あの馬鹿はどうにかならんのか」

父が、唸るようにつぶやいた。

「どうしようもないよ。キース。あの子があたしらの言うことを聞いたことがあったかい？あたしらは、あの子が無茶を言う度に、あの子を止めようとした。剣を習うと言った時も、村の自治団に入ると言った時も、王都騎士学校に入ると言った時も。だけど、あの子は聞かず、最後にはいつも、自分のやりたいことをやり遂げて、いまじゃ、王都第一騎士団の騎士団長様だ。あたしらに拒否権はないよ。さっさと、荷造りを始めないとね」

母は、そう言つと、二階に上がって行ってしまった。父はまだ唸っている。だが、母が決めたのならば、これはもう確定だ。ため息をつき、私も、徹夜になるだろう荷造りを手伝いに行く。最高にはた迷惑な兄に祝福代わりにどんな仕返しをしてやるうかと思いつつ。

翌日の早朝、激しく扉を叩く者がいた。徹夜で荷造りをしていたナーシャは、早くも迎えの者が来たのかと応対に向かった。だが、開ければ、見覚えのある屈強な男たちが、我が家を囲んでいた。一様に皆固い顔をしている。こんな早朝から、何の用であろうか。

「どうした？こんな朝から、こんな大人数で」

訝しげに問いかければ、その中でも強面の男が、焦れたように言う。

「そりゃあ、団長。気になって来ちまったに決まってるまさあ。王都から団長んちに、飛龍が来たって話じゃありませんか」

目線で何があったと問いかける男達に、ああ、こいつらともお別れなのだと思うと、少し寂しくなった。

「王都に行くことになった。今日、出発する」

「……………はああ？」「……………」

男たちが、一斉に叫ぶ。思わず耳をふさぐ私の肩を、誰かが叩いた。振り返れば、驚いた顔をした父がいた。

「おい。ナーシャ。おまえ。団長って、今、呼ばれてなかったか？
だが、この方たちは、紅獅子団の方々だろう。どういうことだ？」

紅獅子団とは、この地方に駐留している王国直属騎士団の名前だ。団の名に似て荒くれ者が多いが、腕前は確かな上、規律を厳守し、自分たちが騎士であることに誇りを持っている者たちである。地元住民は彼らを信頼し、自分たちを守ってくれる存在として、敬愛している。そんな方々が、自分の娘を団長と呼んでいるのだ。父が驚くのも無理はない。

「ただのあだ名ですよ」

さらっと答えると、騎士達が、余計な口をはさんできた。

「そんな〜。団長」

「俺達、一生団長についていきます」

「貴族のお坊ちゃん団長、ルーファスの野郎を倒した時のあの凛々しさ」

「俺達の誰も敵わない団長の剣技に、俺、惚れました!」

「あつ。ずりいぞ、おまえ!」

「お、おれは、剣技じゃなくて団長に惚れてます!」

「てめえ!どさくさにまぎれて何言ってるやがる!」

「先月のバナド（狼型魔獣）討滅作戦だって、指揮してたのは団長じゃないですか」

「あの名ばかり団長が風邪だって、逃げやがって困ってた俺達に救いの手を差し伸べてくださったあの時の嬉しさ」

「あのバナドが怯え逃げ惑った、鬼神とも言っべきあの強さ」

「どんどん、不味いことをばらしてくれ。わが愛しき団員達。そろそろ、息の根を止めるべきかな？」

そんなことを思っているのが分かったのだろうか。騒ぎ立てていた団員達がピタリと口を閉じた。それに、にっこりと微笑んでやる。ザーッと顔から血の気を引かせる彼らは無視して、恐る恐る後ろを振り返った。

父は、なぜか微笑んでいた。何かをあきらめるかのように。

「まあ、仕方がないな」

そう言って、私の頭をなでた。

「お前は、『あの』キールの妹だからな」

あの兄とは。つまり。神聖なる騎士学校で裏博打を開き、しかもそれに校長を含めた教職員までが参加していたとして大騒ぎを引き起こしたあの兄と。ゲサ（強暴巨大牛）退治の後、部下と共に焼き肉パーティをしたあの兄と。王都の女性で、手を出されてないのは子供と老人だけといわれているあの兄と。∴男に手を出してないかについては、諸説あるらしい。まあ、とにかく、そんな兄と私が似ているということでしょうか？ お父様。

固まるナーシャを置いて、父は何やら感慨深げに頷きつつ、家に戻っていった。後ろから、団員達が恐る恐る、という風に声をかけてくる。

「あ、あの。団長？」

「・・・お前たち」

振り向いた私の顔を見て、彼らは一様に、一步、後退する。そんなにひどい顔だろうか。ふふふ。ぐっと、顔をあげ、腰に手を当てて、宣言する。

「飲みに行くぞ！」

「……………はああ？」「……………」

再び一斉に叫ぶ団員達。本当に、こんな時だけは団結力のある奴らだ。その高い実力と団結力。たとえ小娘であっても、相手の実力を認めれば敬う潔さ。そんな彼らだからこそ、ナーシャは団員たち

を仲間と認め、手を貸したのだ。一人一人の顔をじっくりと見ていく。今日限りでお別れの、大切な仲間たち。

「私の旅立ちを祝して今日は朝から飲むぞ！ ついて来い！」

そして、ナーシャは伝説になった。あの紅獅子団員と飲み比べで圧勝し、さらには饑別だといい、饑別っていうのは旅立つ側が受け取るもんでしようと抵抗を試みる、二日酔いの団員達に最後の猛特訓をして旅立っていった鬼団長として。

ちなみに、ナーシャ一家は予定より一日遅い、結婚式前日に王都についた。その理由というのが、ナーシャと団員達の宴会に巻き込まれた迎えの者が全員酔いつぶれて、丸一日使いものにならなかったからというものであった。

「ふう。助かったよ。おかげで、村の皆にちゃんと挨拶ができた。

ねえ。キース」

「リュサ・・・」

一番の大物は、あの二人を育て上げたリュサなのかもしれないと思っただキースだった。

畏怖と敬愛を貴女に。

ガレンシア家で開かれた宴は見事なものだった。そして、それに参加する人々も。絢爛豪華な衣装にそれを引き立てる装飾具。女性には華やかに髪を結びあげ、男性は勲章や紋章でその身分を誇る。眩暈がしそうなほど、煌びやかな人々。

本当に、素晴らしいほど、自分には合わなかった。

ナーシャは、一人部屋でため息をついた。次第に会場にいるのを苦痛に感じ始め、主役たちが愛の巢に引き上げるや否や、早々に自室に戻ったのだ。

そう、あの兄夫婦は彼女に、ほいっと、それはもうすごい部屋を下さった。今まで自分が暮らしていた部屋がトイレの広さに負けているのに気が付き、涙するような部屋を。室内装飾も無駄に豪華だ。

その自室の重厚な扉を誰かがノックする。

「どうぞ。」

入ってきたのは、メイドだった。

言われるままに、そのあとについていくと、そこは。

「・・・ここは、兄達の寝室では？」

さすがのナーシャにも、あの新婚らぶらぶバカップルの部屋に堂々と入っていく勇氣はない。

どうしようか迷っていると、ふいに、開いた扉から伸びた腕に部屋の中に引きずり込まれる。

すると、中では両親とナスターシャが、向かい合わせのソファに座っていた。ナーシャは、自分をこの部屋に引きずり込んでくれた兄を見上げた。

「・・・兄さん。そんな趣味が・・・。」

「おいっ！ ちょっとまで、おまえ、とんでもない想像をしなかったか、今。違うぞ。誤解だからな。そんな生暖かい目で俺を見るな。おいっ。ナスターシャ、父さん、母さん。何とか言ってくれ。俺はそんな男じゃないって。って、なんで皆、目をそらすんだ。」

「さて、兄さんで遊ぶのはこのくらいにして。」

え、俺もてあそばれたの！？ と、泣き崩れてみせる兄を放っておいて、彼女は、母の隣に座る。

「で、ご用件は？」

「お、おい。ナーシャ。」

父が焦っている。さすがに、四大貴族相手に、この態度はまずかつただろうか。

だが、当の四大貴族様は、泣き崩れる夫を面白そうに見ながら、扇子をひらひらと振り、構わないと微笑んだ。

「今日から、ナーシャさんは、私の妹ですもの。名前もなんだか似ていますし、ふふ、本当に妹ができたみたい。私、兄弟がおりませんでしたから、こんなに可愛い妹ができて嬉しいわ。式の間が迫っていたものだから、正式なご挨拶はまだでしたわね。ごめんなさい。私は、ナスターシャ・ローランド・ガレンシアと申します。ナスターシャで構いませんわ。これからよろしくね。ナーシャ

ってお呼びしてもよろしいかしら。」

そう言っつて、柔和に微笑む佳人に、私は頬を染めて、つぶやいた。

「どうやって、騙したんだろう。こんなに素敵な人。あの馬鹿兄にはもったいない。」

隣で両親が思わずという風に頷く。

「騙してなんかいない！俺とナスターシャは相思相愛の恋愛結婚だ！」

いつの間にか復活した兄がナスターシャさんの横に座っていた。

「嘘だ」

「本当だって！」

「ふーん」

「あつ！信じてないな！」

パンツ。

扇を閉じる音がナーシャと兄のじゃれ合いを止めた。見れば、ナスターシャがそれはそれは美しい笑顔で微笑んでいた。

「話を戻してもよろしいかしら。」

その笑みに、兄とともに、必死に何度も頷く。わが兄よ。早くも尻に敷かれているのか。そしてナスターシャさん。その笑顔、マジで怖いです。さすが、この馬鹿兄の手綱を握るだけではありませんが、どうか、やめてください。

すべてを分かち合い、共に乗り越えてゆく。

眩しいほど鮮やかな黄金の髪に、深遠な青の瞳を持つ女性が目の前に微笑んでいる。

彼女の名はナスターシャ・ガレンシア。

四大貴族であるガレンシア家当主の唯一の娘にして、わが兄の妻。ああ、兄のお嫁さんにはもったいない。

「ナーシャ。」

可愛らしく小首をかしげて、ナスターシャさんが話しかけてくる。だが、次の一言は、そんな仕草でごまかされるわけにはいかない代物だった。

「ナーシャには、セントヘレナ女学院に入学してもらいます。」

「……ええ!!!」

度肝を抜かれた。セントヘレナ女学院とは、超お嬢様学校だ。生徒達はほぼ国内有力貴族のご令嬢であり、将来的に、それぞれの身分に見合った家に嫁ぎ、よき妻、よき母となるための、いわば花嫁学校にあたる。なぜ、こんなに詳しいかというと、そのセントヘレナ女学院の隣に、兄の母校である王都騎士団学校があり、兄の手紙の中で、よく触れられていたからだ。その内容は、まあ、その、大変欲望にまみれたもので、とてもナスターシャさんにはお教えできない内容だった。

「そ、そこまでしていただくわけにはいきません。」

父が焦った風に言う。私達は今、ガレンシア家に居候している状

態だ。その上、学校まで通わせていただいては申し訳ない。それに別の問題もある。

「あのナスターシャさん。私、学校に通ったことがないのですが、」

そう、教会で基本的な読み書きこそ習ったものの、ナーシャは、学校に行ったことがなかった。そんな彼女が、お嬢様学校の授業についていけるとは思えない。

「大丈夫。あの学校は、ただ単に従順な家の付属品を育てるためのものですもの。多少成績が悪くとも、大人しくさえして、お金をちよつと多めに積めば、見逃していただけますわ。」

コロコロと笑いながら、ナスターシャはとんでもないことを言った。というか、ものすごく偏見が入っていませんか。なにか、恨みでもあるのでしょうか。

「その話、受けるよ。ところで、それはおいといて。」

それまで口を閉じていた母が、兄を見ながら問いかけた。え、まっつてください。お母様。私の入学は決定事項なんですか。

「キール。私達は、いつまでここに閉じ込められなくちゃなんないんだい。」

その母の一言で、その場の空気が、一気に張りつめた。全員が、それまで、あえて触れなかった話題だった。母は、それを気にすることなく話を続けた。

「状況を整理しようかね。まず、ガレンシア家には、ナスターシヤさんしか、子供がいない。そして、女性の当主が少ない今の世の中、おそらく、ナスターシヤさんの夫が、強大な権力を持つガレンシア家の当主になるだろう。その夫に、どうやったかは知らないけど、うちのキールが選ばれた。本当に、わが子ながら、こんな馬鹿でいいのかと聞きたいとただけれども。まあ、仕方ないねえ。子供ができてしまったのだから」

「「「「はあ!?」「」「」」」

これには、真っ赤になって絶句しているナスターシヤさん以外の全員が叫んだ。兄が、硬い声で母に尋ねる。

「か、かあさん。なんでそれを」

「馬鹿にするんじゃないよ」

母は、やれやれという風に首を振った。

「あんとナーシヤを生んだのは誰だと思ってるんだい。子供がいることぐらい、すぐに気がついたさ。それよりも、キール。後で、ちよつと話があるから、私達の部屋に来な」

最後の部分は、ドスが効いていた。母は、女性に対する態度については、かなり厳しい人だ。未婚の女性に手を出して、妊娠させたことについてかなりお怒りらしい。兄の顔色が悪い。ご冥福をお祈りする。

「さて、話を戻すよ。それで、うちのキールはめでたくナスターシヤさんを射とめられた。二人が愛し合ってるのは、今日一日でよくわかった。まさか、キールがあんな目をするようになるとはねえ。

お前は、いつまでも、ふらふらして、本当は心配していたんだけれど、今じゃ、ナスターシャさん以外は見えないうつだから、もう、安心だね。といつても、時と場合を考えなさいな。・・・聞こえてないわねえ。これは。」

目の前の若夫婦はと互いを見つめ合い、二人の世界に入りかけている。仕方がないので、兄の頭をしばいてこちらの世界に連れ戻す。

「はい。はい。いちやつきたいのは分かるけど、後でね。お母さん。話を続けて。」

「ありがとう。ナーシャ。まあ、新婚夫婦の邪魔をするのもなんだから、単刀直入に言うよ。私たち夫婦は、後もうちよつとしたらここから出ていく。幸い、騎士団専属の鍛冶屋につてがあつてね。そこで働かせてもらおうと思う。」

兄夫婦が、焦つたように、何かを言いかける。

「兄さん。大丈夫だよ。」

私は、やれやれといったふうに苦笑しながら言った。

「私達も、馬鹿じゃないんだ。状況は分かつてるよ。兄さんがガレンシア家次期当主になった時点で、私達もまた、四大貴族の縁続きになった。すごいことだ。そう、鍛冶屋の身には余る光栄だね。おかげ様で、私達は元の生活を捨ててはならなかった。私達に利用価値を見いだして近づいてくるハイエナがそれこそうじゃうじやいるだろうし。あのまま、村にいたら、そういう輩に利用されるか、最悪、誘拐されて、兄さんへの脅迫の道具になるってこともありえただろうね。」

最後の方が、厭味つたらしくなったのはご愛嬌だ。まったく、はた迷惑な兄だ、私と母は手紙を読んだ時点で、この可能性に思い当り、だから、素直にこちらに來た。そうでなければ、あんな身勝手な手紙、無視したに決まっている。母が、頷いて話を引き継ぐ。

「ナーシャの言う通り、あんたの両親だと人に知られるのは、百害あって一利なしだね。だから、その 騎士団専属の鍛冶屋じゃ、名前とかは変えて働こうと思ってるんだよ。あんたとは何の関係もない人間としてね。最大の問題だったナーシャは、悪いけど、ここにおいて行かせてもらうことにしよう。キースとしばらく新婚気分を楽しませてもらうよ」

兄は、絶句していた。

沈黙を破ったのは、ナスターシャのはじけるように笑い声だった。

「おみごとですわ。・・・ふふふ！」

今まで見た中で、一番『彼女らしい』と感じる笑顔だった。

「キール。あなたのご家族を信用しましょう。この人たちは、すべてを隠し通して守る相手じゃないわ。全てを分かち合って、共に乗り越えていくにふさわしい方々よ。」

そういって、夫の手を取ったナスターシャに、兄は苦笑した。

「そうだな。」

和やかな空気が流れる中、母が立ちあがる。

「さて、キール？」

その優しい声音に、兄が真っ白になる。

「ちょっと、あっちで話そうねえ？」

母に、ずるずると引きずられていく兄を私と義姉は手を振って見送った。

「いいの？ナスターシャさん。新婚なのに。」

「あら。彼との愛はいつでも確かめられるわ。それより、私は、かわいい妹とお話ししたいのだけれども、お相手を願えまして？」

そうして、彼女の女学院時代の話聞いた。

そして、悟った。

うん。さすがは兄のお嫁さんだ、と。

邂逅。それは二人がくれた最高の贈り物。

うーん。最悪。それがこの学院の第一印象。セントヘレナ女学院は、聞いていた通り、階級意識にとらわれた、鼻持ちならぬお嬢様のすむ魔窟であった。庶民出の自分を蔑む、あるいは、完全に無視するお嬢様方に囲まれ、ナーシャは三日目、午前中の授業を終えた。

「はあ。先が思いやられるな」

ため息をつきつつ、机の上を片付けていると、小柄な女生徒が近づいてきた。

「昼食を一緒にいたしましょう。ナーシャ。」

温和な雰囲気をもとう女生徒の名は、アンナ・ロバート。代々、優秀な武官を輩出する中級貴族のご令嬢にして、目下、この学院におけるナーシャの唯一の友人だ。とりたてて美人というわけではないが、美貌を誇る他の生徒よりも、ナーシャは彼女の方が人間として好ましかった。貴族という地位に胡坐をかき、成り上がり者であるナーシャを見下すしか能のないお嬢様方とは雲泥の差だった。

「うん。そうしよう」

成り上がり者の自分と一緒にいることで、陰口をたたかれることもあるのに、彼女は自分に話しかけることを止めようとはしなかった。自分と付き合いだしてから、アンナの友人をやめてしまったものもいるという。そのことを気にして、尋ねると、「あら、私を見捨ててしまわれるの？ ナーシャ様。私はこんなにあなたが好きな

のに。」と、笑いながら言ってくれた。そんな彼女に抱きつき、私も大好き！と思わず叫んで、お互いに真っ赤になったのは、また、別の話だ。

そんなこんなはありつつ、ナーシャは学院生活に結構順応していた。

「ナーシャ様。この学院はいかがでした？」

昼食を食べつつ、アンナが尋ねる。

幾分、大きな声なのは、周りがうるさいからだ。この食堂は、生徒間の交流のためということ、隣の騎士学校と共同になっている。元気な男の子達の談笑に甲高い女子達のおしゃべりの声がまじり、声を張り上げないと、目の前の相手が何を言っているのかもわからない。

「まあまあかな。だいぶ慣れたよ」

それに、アンナが何かを言おうとしたその瞬間。

食堂内が、ざわめき始めた。訝しんで周りを見渡すと、生徒たちは皆、入口付近を見ているようだった。周囲が、だんだん静かになっていく。

「何事？」

声をひそめてアンナに聞けば、複雑そうな表情で、その問いに答えた。

「例の自治会の方々ですわ。珍しい。」

自治会。その単語に思わず目を丸くした。それは、基本的に上級貴族のみで構成される、騎士学校・女学院共同の生徒達による学園

運営のための自律組織である。教師の権力さえもしのぐといわれる彼らは、将来、国を担ってゆく優秀な人物ばかりであり、その自治会に所属することは生徒たちにとって最高の名誉とされている。

へえ。初めて見るな。ナーシャは、興味しんしん、といった感じで、入口に目を向けた。自治会の構成員たちは、上流貴族の人間が多い。そのため、普段は、自治会専用の特別室で、お抱え料理人に食事を作らせているという話だった。そんな彼らが、何の粹狂か、こんな下々のいる食堂までお出ましになられたらしい。

自治会専用の白い制服に身を包んだ5人の男女がだんだんとこちらに近づいてくる。(ちなみに、一般生徒の制服は黒である。)どうやら、先頭の男二人が言い争っているようだ。後ろからくる女生徒が、それをなんとか止めようとしている。何を話しているか聞き取れるほど、彼らが近づいてきて、ナーシャはその容姿端麗さに目を丸くした。こいつはすごい。しかも、自治会ということは成績も優秀なんだろう。神は彼らに二物を与えたようだ。

「……だといっているだろうが！」

「それがどうした。俺には関係ないね。」

「貴様！」

男二人の口論はますます熱くなり、一方がもう一方に殴りかかるうとする。

すかさず、止めに入る女子生徒。興味深げにそれを眺めていたナーシャは、次の単語に、耳を疑った。

「カイ！ やめて！」

「コウ、下がっている」

カイ。コウ。そう呼び合う二人を彼女は知っていた。魂に刻まれた、己が主の名だ。二人の生徒を、じつとよく見る。容姿も年齢も自分が最後に見たものとは違う。だが。

目の前の二人と、かの人たちの姿が、重なって見えるのはなぜだろうか。ああ。そうだった。昔も、よく、カイさまが暴走して、コウ様はそれを止めようと必死になられていた。

だが、コウ様では、力づくでカイ様を止めることはできなかった。だから、そんな時は、私が。

その時、カイが、コウの腕を振り払い、先ほど口論していた生徒の胸倉をつかんだ。反動で倒れかけた彼女を支えたのは、いつの間にか、二人の後ろに来ていたナーシャであった。目を丸くするコウを優しく立たせてやると、ナーシャはすばやく、目の前で言い争っている男二人に近づいた。そして、今にも相手に殴りかかろうとしているカイに、流れるような動作で、回し蹴りを決めた。

周囲が、重い沈黙に包まれる中、ナーシャは片手を腰にあて、床に倒れ伏したカイを睨みつけていた。

「貴様！どういっつもりだ！」

床から身を起こしつつ、怒鳴りつけてきたカイにひるむことなく、ナーシャは優雅に微笑んだ。カイは、その微笑みに何か親近感を覚え、身を震わす。それが、懐かしさからなのか、恐ろしさからなのかはわからなかったが。

「どういっつもり・・・ですか？カイ様。それはこちらのセリフでございます」

地を這うような声とは、こういうことを言うのかと、周囲の生徒は思った。と、同時に、ナーシャの言葉に息をのんだ。彼女は知ら

ないことだが、カイとコウは、お互い以外の相手に、その呼び名を許さない。以前、間違えてよんだ生徒が、半殺しの目に合った上、学院から退学にされた。だが、彼らは知らない。かつて、カイとコウが、お互い以外に、その名を呼ぶことを許した、ただ一人の存在を。

「アヤはかなしゅうございます。」

コウとカイが、目を見開いて自分を見てくる。その反応に、やはり彼らだという確信を強めて、彼女は狂喜した。そして、この世のすべてに感謝した。彼らと再び出会わせてくれた、世界に……。だが、それは、それ。これは、これ、だ。自分は、アヤ。彼らの側仕人にして教育係なのだ。主人の間違った行いを正すのも、また己の使命である。

「あれほど、申し上げましたでしょう。なんでも暴力で解決するのは良くないと。しかも、先ほどのコウ様へのおふるまい。私が受け止めたからよかったものの、あのまま倒れていたら、お怪我をなさったやもしれません。」

そう言って、さて、恒例の鉄血制裁といきますか。と極上の笑みを浮かべたアヤにコウが後ろから抱きつく。

「アヤ！会いたかった！」

それを見て、それまで床で呆然としていたカイもまたアヤに抱きついてきた。

「アヤ！本当にお前なのか!？」

前後から二人に抱きつかれ、身動きが取れない状態で、アヤは微笑んだ。それは、彼女が最後に見せたのと同じ、慈愛に満ちた微笑みであった。そんなアヤにコウとカイは顔を歪める。コウが恐る恐るといった風に訪ねてきた。

「アヤ、私達にかかわったことを悔やんだ？」

「俺達は、いつでも周りに「コウ・カイ」を運んでくる存在だから、その運命に、お前を巻き込んでしまった。すまない、アヤ。」

それは、カイとコウの親が、そして、その周りの者たちが、その特殊な生い立ちゆえに、幼いころから二人に言い聞かせていたことだった。二人は両家に災いを運ぶ、「コウ」「カイ」・・・後悔であると。

不安げにこちらをみやる二人の頭を撫で、アヤは微笑みながら言った。

「いつも、申し上げておりましたでしょう。お二人は、私にとって幸せそのもの。お二人は、私に幸せを運んできてくださいます。よろしいですか。お二人の名は「カイ」「コウ」。『懐逅』でございます。ほら、今もまた、私に、二度と会えぬと覚悟していた、この世で最も愛するお二方と会わせてくださったではありませんか。」

その言葉に、二人はさらに強く抱きついてきた。

それを、アヤは泣き笑いで抱き返す。

この後、騎士たるものの心得をアヤがカイに叩き込み、コウがそれを見て、もうカイの暴走を自分が止めなくてすむとほっとしたというのは、また別の話だ。

邂逅。それは一人がくれた最高の贈り物。（後書き）

ここまでお付き合いいただき、ありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0513o/>

邂逅

2011年9月2日19時18分発行